

テーマ別パスファインダー



## ミャンマー近現代史の参考資料



### ✦ パスファインダーとは？

Pathfinder（パスファインダー）とは、探検者／草分け／開拓者の意。レポート作成や論文作成で、何をすればいいのか、どこへ行けばいいのかわからない！そんな人のための助けになるように作成した、学問の「道しるべ」です。

作成日：2019年6月18日  
大阪大学 外国学図書館 | 箕面キャンパス |  
ラーニングコモンズ るくす | LSチーム

## I. イントロダクション

### ■ なぜミャンマー近現代史を学ぶのか？

現代ミャンマーは、民主化問題や民族問題を抱えています。これらの問題をよく理解するためには、その歴史を学ぶことがとても大切です。このるくぱすで紹介する文献を読んで、みなさんも一緒にミャンマー近現代史を学んでみませんか？

関係分野：歴史学（政治史）、文化人類学

## II. 概説

### ■ 石井米雄・桜井由躬雄（編著）（1999）『大陸部（世界各国史 5 東南アジア史 I）』新版 山川出版社

東南アジア大陸部の歴史を通史として描く。ミャンマーの部分を繋げて読むだけでも、通史として十分な理解を得られる。巻末に付されている参考文献表が、読書案内としても有用である。

【外国図-4 階開架 209||75||5】

### ■ 根本敬（2014）『物語ビルマの歴史：王朝時代から現代まで』中央公論新社

近現代ミャンマー史の専門家によるミャンマー通史である。そのため、植民地時代以降の記述が8割以上を占めている。ミャンマー国家が多民族・他宗教国家であることを説明しながら、ミャンマー・ナショナリズムの形成過程とその意義を分かりやすく描写した。また、読者を飽きさせないように各章末にコラムが付され、一部マニアックな話も含みながら、歴史的事象に興味を持てるように配慮されている。

【外国図-4 階新書 223.8||321】

### III. 植民地時代

#### ■ 根本敬 (2010) 『抵抗と協力のはざま : 近代ビルマ史のなかのイギリスと日本』 岩波書店

本書の目的は、「イギリスの植民地であったミャンマーにおいて 1920 年代から 30 年代にかけて台頭した土着のミャンマー人政治エリートと行政エリートが、宗主国である英国と、アジア・太平洋戦争期の占領者である日本に対し、どのような認識に基づき、どのような関係を築いて行動したのかを追求すること」である。独立後ミャンマーにおける歴史の語りはナショナリズムを強調するためという観点から、植民地支配に対する「抵抗」の側面を重視した記述が中心となっている。

その一方で、戦後の英国や日本で出版された近代ミャンマー史関係の書籍には、現地人が植民地支配へ「協力」した側面にもバランスよく振れた傾向を持つものが存在するという。この点に問題意識を持つ著者は、「二つの側面がいかにつながり合っていたのかという視点が欠けている」と指摘し、「あれかこれか」式のとらえ方では解釈できない植民地期におけるミャンマー人政治・行政エリートの現実の歩みを、英国と日本それぞれに対する「抵抗と協力のはざま」という枠組みを設定してミャンマー史を辿る。

【総合図-書庫棟 研究用図書 223.806||NEM】

#### ■ Robert H. Taylor (2009) *The state in Myanmar*. University of Hawaii Press.

本書はミャンマー近現代史研究において高名なロバート・テイラー氏による著作で、1987 年に出版された *The State in Burma* の増補改訂版である。「ミャンマーにおける国家」というタイトルの通り、ミャンマー史の流れを国家成立の視点から辿る。植民地主義批判から出発した著者は、現地ナショナリズムを尊重する立場を採っており、ビルマ式社会主義体制を肯定的に描いたため批判も多数出ている。

【外国図-4 階開架 312.238||93】

### IV. 独立交渉期～議会制民主主義期

#### ■ ဦးကျော်ဝင်း, ဦးမြဟန်း, ဦးသိန်းလွင် ဟော(1990) တိုင်းရင်းသားလူမျိုးများအရေးနှင့် ၁၉၄၇ အခြေခံဥပဒေ။ သမိုင်းဌာန ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်။

独立交渉期の政治を扱った 2 巻から成る研究書。第 1 巻では、第 1 章で 1825 年に発生した第 1 次英緬戦争から第 2 次世界大戦期までにおけるイギリス植民地行政とその下での政治過程、第 2 章でカレン州創設運動について扱い、独立交渉期ミャンマーの政治状況は第 3 章以降で描かれる。

第 2 巻では 1947 年憲法の起草をめぐる議論を詳説する。事実の叙述に徹して歴史的評価を避けている感もあるが、一次史料に加えて回想録や、インタビューなど幅広い資料を活用しており、ビルマ語でミャンマー独立史を勉強するための入門書として有用である。

英語妙訳版として *The 1947 Constitution and the Nationalities* がある (ただし、2019 年 6 月現在、大阪大学附属図書館では未所蔵)。

【外国図-1 階書庫ヤンゴン 312.238||MB-223】

■ **Maung Maung (1989) *Burmese Nationalist Movements, 1940-1948*. Kiscadale.**

戦後のミャンマー国軍幹部であり、軍内では穏健派であったとされるマウンマウン大佐による著作。ナショナリズムの形成過程と、それと密に関わったミャンマー国軍の役割を説明する。

【外国図1階書庫一般 223.8||143】

■ **Mary P. Challahan (2005) *Making Enemies: War and State Building in Burma*. Cornell University Press.**

著者は、ミャンマーではなぜ軍事政権がなぜこれほど長期的に維持されえたのかという問題意識のもと、戦争が国家形成に寄与したと主張する。特にミャンマーの場合は、政党や官僚制度、圧力団体がほとんど形成されず、時代を経るに従って軍の影響力が強まったという。

【外国図1階書庫一般 312.238||84】

## V. 軍事政権期以降

■ **中西嘉宏 (2009) 『軍政ビルマの権力構造：ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962-1988』  
京都大学学術出版会**

本書は、ミャンマーで1962年から続く軍事政権について、軍内人事から考察を行う。他の社会主義国家との比較や観念論などで議論されてきたにもかかわらず、これまで実態がよく分かっていなかったビルマ式社会主義の登場経緯を明らかにした。筆者によると、ビルマ式社会主義をめぐる理論づくりはもともと軍事クーデタを起こすことに反対していた軍穏健派によるプロジェクトであった。しかしながら、「新体制がネー・ウィンの強力なリーダーシップのもと、きわめて場当たりに構築され」るなかで(94頁)、軍はビルマ式社会主義を正当性の根拠として都合よく導入した。

【外国図-4階開架 223.8||173】

■ **佐久間平喜 (1984) 『ビルマ現代政治史』 勁草書房**

元ミャンマー外交官によるミャンマー政治の動向分析。1962年より「国家元首としてミャンマーを指導していたネ・ウィンが、1981年11月に大統領を辞任し、いわゆるポスト・ネ・ウィン時代が始まって、ミャンマー現代政治史上に新しいうねりが予測され」たために出版された(iv頁)。

【外国図-4階開架 312.238||35】

## VI. テーマ別① 民族

### ■ 高谷紀夫 (2008) 『ビルマの民族表象：文化人類学の視座から』 法藏館

本書は、ミャンマーの少数民族シャン (Shan) を対象として、その文化動態を探る。一般的にシャン族とは、タイ (Tai) 系言語を話す人々とされ、ミャンマーの場合はシャン州を中心に 290 万人程度いるとされる。しかしながら、民族的にシャン族とされる人々が、シャン語を母語としてシャン州においてのみシャン文化を伝統としているとは限らない。ときに彼らは他の地域に住み、ビルマ語を母語としている。また、政治的マジョリティであるビルマ人に配慮しながら、自文化の保護活動に取り組んでいる。

著者によると、「多民族国家を国是とする政治体制下では、民族表象は政治性を有さざるをえない。… (中略) …民族表象は、仮に「部分的真実」であっても、創造されたフィクションであっても、実体化しうる、あるいは実体的なものとして解釈される」(5 頁)。さらに多民族国家ミャンマーの場合、「マイノリティ側は、一方でマジョリティ側の言説が優越する脈絡において周縁的に表象化され、他方で、その制約の中で独自のポエティクスを構築しようとしてきた」側面があると著者は指摘し、「前者を“シャンのビルマ化”、後者を“シャンのシャン化”と呼んだ (5-6 頁)。“シャンのビルマ化”については、ビルマ側によって「シャン」と結びつくと考えられている精霊信仰の実践と伝説を検討した第Ⅲ部で、“シャンのシャン化”については、「シャン」文化保存の動向を分析した第Ⅴ部で論じている。

【総合図-書庫棟 研究用図書 382.238||TAK】

### ■ 和田理寛 (2016) 『民族共存の制度化へ、少数言語の挑戦：タイとビルマにおける平地民モンの言語教育運動と仏教僧』 風響社

本書は、タイとビルマにまたがって存在するモン (Mon) 族の調査をつうじて、両国で少数民族言語がどのような立場に置かれているのかを論ずる。東南アジアの多くの国では、国民統合や画一的な教育制度のため、共通の公用語が公教育で使われるようになった。そのため少数言語話者は公用語への同化あるいは、学習負担を増やして自言語教育を行うかという不利な選択を迫られる。タイ語やビルマ語と系統が異なることばを話すモン族の場合、タイやビルマに同化しやすい傾向にあるが、タイとビルマでモン語を取り囲む環境は異なる。すなわち、産業発展や学歴社会の浸透によって同化への誘因力が強いタイでは少数言語教育の制度化がなされておらず、「後戻りできない話者消滅への道を歩んでいる」。他方、モン仏教僧が中心となってモン語教育を行っているビルマでは、「自助努力および国の政策という両面からモン語教育が制度化されてきた」という。

【外国図-4 階ブックレット 302.2||189||39】

## VII. テーマ別② 民主化

### ■ 田辺寿夫（1996）『ビルマ：「発展」のなかの人びと』岩波書店

大阪外国語大学ビルマ語学科出身のフリージャーナリストの田辺寿夫氏による著作。日本でもよく知られているアウンサンスーチーを切り口に、ビルマの政治経済状況を解説する。ジャーナリストという立場を生かして、実際に本国で民主化闘争を経験したビルマ人活動家たちを紹介し、とくに日本で暮らすビルマ政治難民の実態から軍事政権が国民生活に与えている影響を述べた。

【外国図-4 階新書 302.238||56】

----- MEMO -----



## ✧ [パスファインダーの凡例]

■ 図書情報は以下の順に表記しています。(主に論文の参考文献に使われている書式です。)  
著者名 (出版年) 『本の名前』 出版社名, 翻訳者名 (あれば)

■ 説明の最後に、【 】で貸し出し可能な図書館と配架場所、請求記号を記しました。

総合図 → 総合図書館 (豊中キャンパス)

生命図 → 生命科学図書館 (吹田キャンパス)

理工学図 → 理工学図書館 (吹田キャンパス)

人図 → 人間科学研究科図書室 (吹田キャンパス)

外国図 → 外国学図書館 (箕面キャンパス)

外国図-雑誌 → 直近1~2年に出版されたものは3階雑誌コーナー、バックナンバーは1階書庫

電 → 電子ジャーナル、電子ブック

※雑誌、電子ジャーナルは、すべての巻号が利用できるとは限りません。

■ 検索を容易にするために、ISBN (各図書固有の識別番号) や ISSN (各雑誌固有の識別番号) を記している場合もあります。

■ 外国学図書館を中心に紹介していますので、記載している場所以外でも貸し出し可能な場合があります。図書館各階にある検索端末で確認するか、カウンター/LS デスクまでお尋ねください。